

# 沖ノ鳥島 サンゴで守れ

# 阿嘉島の海一役

水没の危機にさらされている沖ノ鳥島を救うため、阿嘉島臨海研究所(所長・大森信東京海洋大学名誉教授)が協力してサンゴ増殖を試みる案が、十八日東京都内で開かれた水産庁の「サンゴ増殖技術検討委員会」の初会合で了承された。周辺海域を日本の排他的経済水域(EEZ)と主張する上でのよりどころにもなっている同島を守るため、慶良間の豊かな海が一役買いそうだ。



卵から増殖されたサンゴを移植する様子(沖ノ鳥島)「サンゴ」(沖ノ鳥島)「サンゴ」(阿嘉島臨海研究所提供)

## 増移植を計画

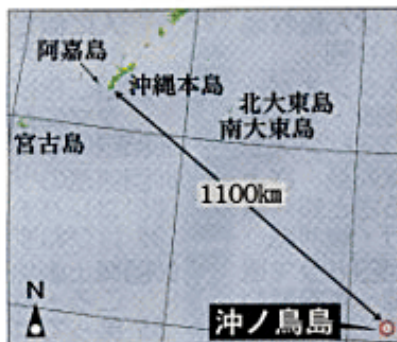
### 臨海研究所で 来月から試み

沖ノ鳥島は東京から約千七百キロ、那覇からは千五百キロ離れた日本最南端の島だが、最高潮時には数平方メートル程度の二つの島が、海面から十センチ前後出ているだけの状態になっている。

一九八七年ごろからは、波の浸食によって島の消失を防ぐための護岸コンクリートも設置されているが、地球温暖化に

並行して行い、これまでにデータに乏しかった沖ノ鳥島のサンゴの生態も同時に明らかにしていく。同研究所によると、今月七日には説明会が開かれ、地元漁協や住民などに計画の趣旨や内容などが説明された。早ければ五月下旬にも計画に着手する。

同研究所の保坂三郎理事長は「基本的には海を守るための取り組み。しかし自然再生の技術を使って、結果的に国土保全につながるのなら、そきないことだ。漁協をはじめ住民の方々も快く協力があったら初めてできる(豊かさ)なので、喜んでほしい」と話した。



今回のDNA解析も

今回はこの人工増殖技術を用い、沖ノ鳥島から採取したサンゴのサンプルや卵を、阿嘉島内に今月にも建設されるセンターの水槽で育て、再び沖ノ鳥島海底に戻す計画。沖ノ鳥島にサンゴを増やし、しんご礁の形成につなげられれば、波の浸食から島を守るほか、遠い将来、サンゴからできた砂が、沖ノ鳥島の陸地を広げることも期待できるといわれている。